

画像にみる「幼児の生活」(3)

— 四十年前の子どもたち (昭和五二年) —

浜口順子

(大学教員)

現在、本誌の口絵で「子どもの情景」(保育者による撮影)が連載されているが、戦後、鈴木孝雄、平野清などの写真家による作品がコーナーで連載されたことがある。

西本真の「子どもたちの世界」シリーズ(昭和五―五二年)では、舞台はどここの幼稚園か不明だが、けんかしたり、退屈そうにしていたりする様子も含め、何気ない日常的な子どもの姿が写し出され、「作品」と「記録」の間のような印象がある。

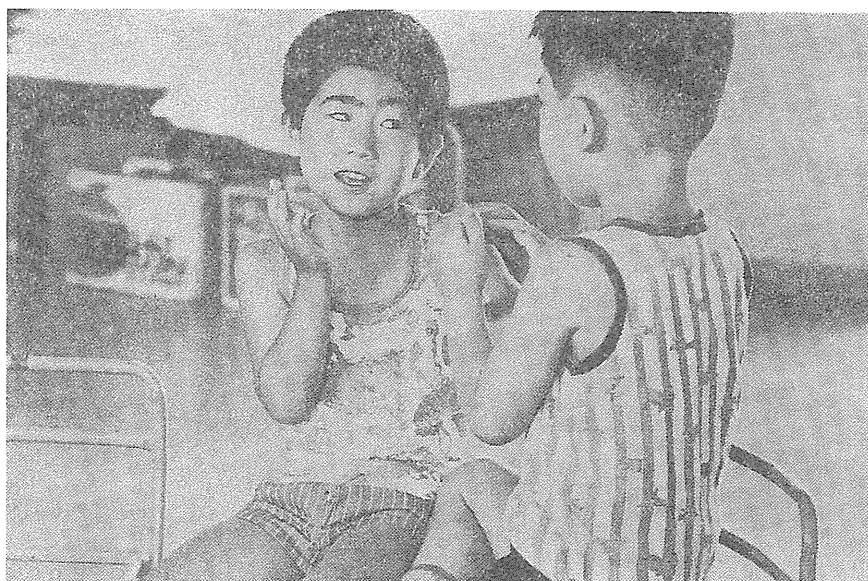
いがぐり頭の半ズボン、ハイソックスの男児。ジュースのストロー缶を積み上げて楽し

む女兒たちの髪は短め。他の写真を見ても、今よりもショートヘアの子が多そうだ。野球帽の男児の胸には「GIANTS」。いかにも昭和らしい。

この子どもたちは、昭和四十年代後半、第二次ベビーブームのただ中に生まれている。合計特殊出生率は2.1台。

現代の子どもよりもたくましそうに見える。しまうのは、単なるノスタルジーだろうか。今ごろは、四十歳代前半の働き盛り、親になっっている人も多かろう。

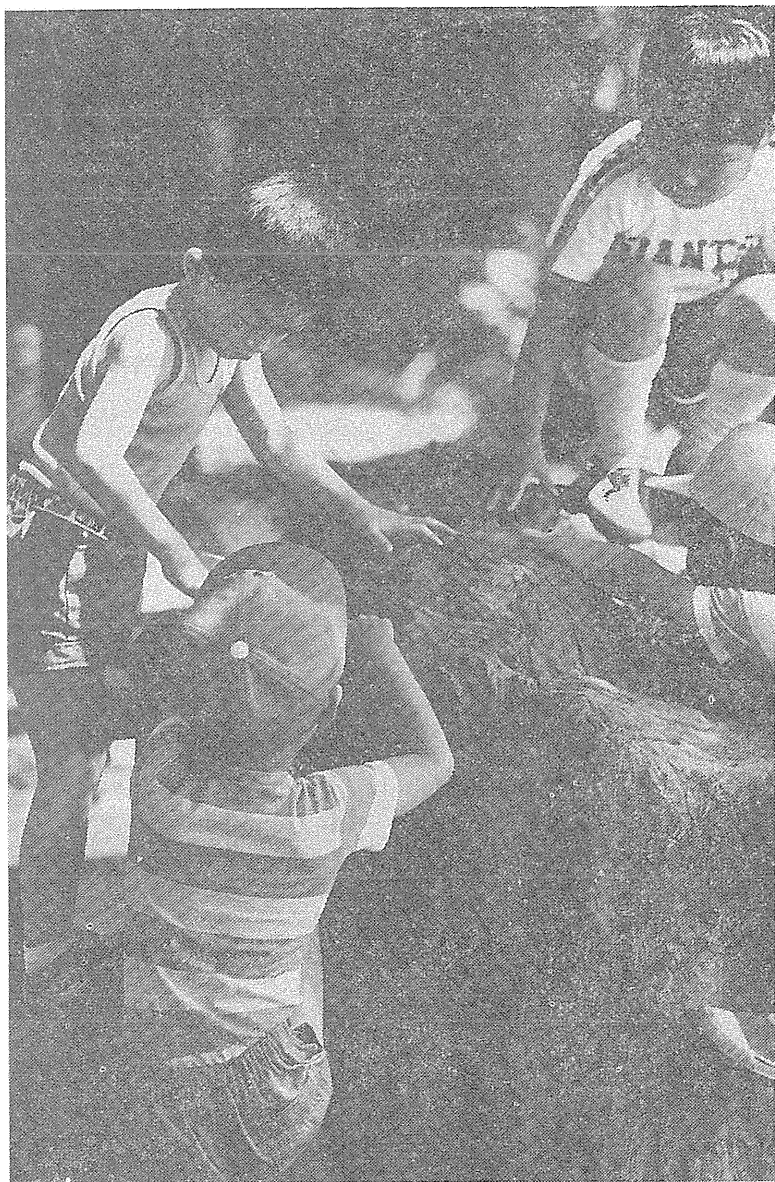
浜口順子(はまぐちじゆんこ)  
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。



▲「あっ、」(『幼児の教育』第76巻第10号/1977年)



▲「いったな!!」(『幼児の教育』第76巻第10号)



▲「猿山？」より（『幼児の教育』第76巻第9号／1977年）



▲「カンカラ」より（『幼児の教育』第76巻第7号／1977年）